

# 私の幼児教育論

——「むごい教育」の対極点にあるもの——

伊藤隆二

## 甘えを助長する教育

徳川家康が幼少の頃、今川義元のところにあずけられたことがあった。一種の人質であった。そのとき、義元は家臣に「竹千代（家康の幼名）にむごい教育をしろ」と命じたという。義元のいう「むごい教育」とは、いったい何だったのか。

家臣はさつそく、その日から竹千代を好き放題にしたのである。欲しいといえ、すぐお菓子を与える。あれが着たいといえ、すぐ美衣をまとわせる。武道に必要な稽古はいっさいおこな

われなかった。これで竹千代は将来、武将となるための基本である体力と武術と教養のいっさいが骨ぬきにされることになる（はずだった）。義元のいう「むごい教育」とは、生きていながら死んだ（ような）竹千代を育てあげることだったのである（しかし、結果的には、桶狭間での義元の敗死によって、竹千代は解放され、全く別の道を歩んだのである）。

義元のいう「むごい教育」は、形はかわっていても、現代の乳幼児にたいしてもおこなわれているのではなからうか。それは子どもの甘えを助長する教育である。

ヨチヨチ歩きをはじめた子どもを、一つの例としてみてみよ

う。子どもははじめから、歩き方が上手なわけではない。ころんでは立ちあがり、またころんでは立ちあがることで、少しずつころばずに歩けるようになっていく。子どもは歩き方が下手なくせに、凸凹の道や坂道を歩きたがる。そういう道では、バランスがとりにくいので、よくころぶ。そばに親がいなければ、子どもは自力で立ちあがる。そしてまた果敢に歩きます……。こういう過程で、子どもは自力を確認し、ころばないための技術を身につけ、またむずかしい課題にもすすんで取りくむ強い子どもになっていく。

私はいつか、自宅の近所を散歩しているときに、ころんだ子どもが立ちあがったあと、うしろをふりむいたのを見たことがある。おそらくその子どもは自分がころんだ理由を、たしかめたかったにちがいない。それは小さな考える力の芽生えであったのである。

ヨチヨチ歩きをはじめた子どもはころぶ——立ちあがる——ころぶ——立ちあがる……という体験をとおして、みずから体力を、技能を、勇気を、そして知力を育てているのである。そのために子どもは好んで悪い道や坂になっている道を歩くのである。失敗するために、そうやって歩くのである。

しかし、近頃の若い母親には、完全欲が強いためだろうか、あ

るいは仔猫を可愛いがる程度の愛情しかないためだろうか、子どもに四六時中、かかわっていないではおれない人が多いようだ。子どもがヨチヨチ歩きをはじめると、ころんだら大変だ、怪我をしたら可哀想だ、と思うのだろう、そばにつきっきりである。子どもがよろけると、母親はさつと手を出す。道の悪いところに行かないように、子どもの行動に制約をくわえる。「そっちへ行つてはダメ」「そんなところへ行つたら、ころぶでしょ」と禁止のことばが多くなる。

子どもが母親の目をぬすんで、道の悪いところにかけて行って、ころぶようなことがあると、母親は動転する。飛んで行って、抱きおこし、二度とこんなことをしてはいけません、と泣き声をたてる。

子どもがひとりで歩いているうちに、またころぶ。母親はまた飛んで行って、抱きあげる。そうしているうちに、またころんでしまった子どもは、母親が抱きあげてくれるまで、泣きつづけるだけで、自分から立ちあがろうという気持はおこらない。子どもは、自分の助長である。自分からすることを体験しなかった子どもは、自分ですることの喜びを知らない。体力も技能も勇気も、そして知力も育たない。四、五歳になると、おとなへの依頼心の強い、やる気のない、意気地なしになっていく。そして小学校にあ

がる頃には、体力の乏しい、運動神経のぶい、自分で考えることを知らない子どもになっていることだろう。

母親は「むごい教育」をやったことになる。

## 鋳型にはめる教育

ころんでワーワー泣いている子どもを助けたいのはむごいことではないか、と反論する人もいる。子どもは助けて欲しいと訴えているのであるから、そばにいますとおとなが即座に応答してやることで、子どもは満足感がえられ、情緒が安定する、子どもの欲求を無視したならば、不満が残り、情緒の障害がおこるのではないかと。

戦後、アメリカ合衆国から輸入された「適応」は、もっぱら子どもの欲求充足によってもたらされ、逆に「不適応」は欲求不満から生じるという図式で説明されていた。この図式をうのみにして、子どもには欲求不満をおこさせてはいけない、子どもをいつでも満足のいく状態にしておかねばならない、と説く識者もいる。しかし、それが義元流の「むごい教育」の典型なのである。

今、幼児にはもう一つちがった「むごい教育」がおこなわれている。私は「鋳型はめこみ教育」とよんでいるのであるが、それ

はかつて中国ではやっていた纏足に酷似している。纏足とは女性の足を大きくしないために、幼いうちから布をかたく巻きつけて、その発育をさまたげるといふ風習のことである。

「鋳型はめこみ教育」の鋳型とは、教師のつくるカリキュラムのことである。

園をあげて、一年間とか二年間のカリキュラムを作成し、保育している幼稚園がある。テレビの番組表や列車のダイヤのようになり、みごとにつくりあげられた、そのカリキュラムを座右において、すべて予定どおりにすすめられる保育によって、子どもたちも、これまた予定どおりに成長していった（ようにみえた）のであるが、気がついたら、カリキュラム（という鋳型）にみごとにはめこまれていたのである。

そのときの、そのカリキュラムの目的は「適応」であったことはいうまでもない。子どもたちは一様に、集団適応力を身につけたのであるが——つまり、指導者の命令に即座に反応し、軌道からはずれず、みな「いい子」（じつは「ませた子」）になったのであるが、子どもひとりひとりからは「じっくり考えぬく態度」も「奇想天外な発想」も、「自分のやり方で積極的に遊ぶこと」の欲「び」も「おっとりとした、おおらかな心情」も、また「孤独に耐える強さ」もすっぽりとぬけ落ちていたのである。

私はかつてアメリカ合衆国滞在中に、大変恥ずかしい思いをしたことがある。いくつかの学校や幼稚園にお邪魔したときに、日本への「おみやげ」というつもりで、校（園）長さんに、「この学校（幼稚園）のカリキュラムをいただけませんか」と、所望したことがある。しかし、どこでもそれは叶えられなかった。いくつかの幼稚園で、園長さんに同じようなお願いをしたところ、話好きなある園長さんから「あなたは冗談をいつているのでしょう」といわれたのである。私はその意味を解しかねていると、彼女はつづけた。「あなたがもしどこかの病院に行つて、院長さんにこの病院のカルテをくださいとたのまれたら、その院長さんがこれが私の病院のカルテです、といつてくださるでしょうか。この病院に入院（あるいは通院）しているAという患者、Bという患者のカルテならばありますと、答えるのではないでしようか。幼稚園（学校）も同じです。幼稚園（学校）のカリキュラムなどはありません。Aという子どもの、Bという子どものプログラム（個別処方箋 Individual Prescribed Program）なら、一応は用意していますか……」と。

私は日本の学校や幼稚園なら、大抵のところ、その学校の、また幼稚園のカリキュラムをみせてもらえるし、所望すればいいだけることが多いので、合衆国でもそうなのだろうと、早合点し

ていたことが恥ずかしかった。しかし、よく考えてみると、学校や幼稚園教育を受けている子どもひとりひとりの個性や適性や才能を無視し、全員に共通した一定の（固定的な）カリキュラムをつくることはほとんど全くといってよいほど、意味のないことなのだということがわかる。それにもかかわらず、学校や幼稚園単位だけではなく、ところによっては市単位で、あるいは県単位で、一定のカリキュラムをつくっているのはどうしたことか。

本来、カリキュラムは子どもの個性や適性や才能の伸展に役立つものとしてつくられたはずなのに、今では逆に、一定の（固定的な）カリキュラムにすべての子どもをあてはめることに終始している。しかも、子どもの成長の評価も、その一定の（固定的な）カリキュラムの到達度によって、ときには子ども同士の比較によっておこなわれている。

このような教育を私は「鋳型はめこみ教育」とよんでいる。それは「むごい教育」である。

### 将来の準備としての教育

「むごい教育」はそれだけにとどまらない。私どもは今の幼児の教育の多くは、幼児のために、おこなわれていないことを知らねばな

らない。それは子どもが小学校に入学したときに、また中学生になったときに、よい成績がとれるようにというねらいでおこなわれていることを指す。

小・中学校時代により成績をとることで、大学進学のための受験教育を熱心にやっている。「一流」の高校に入学することができ、やがて将来、高い地位と名誉と富と権力とを手にするのには有利な「一流」の大学に進学することができる、という暗黙の了解が教師にあるようだ。

幼児の教育も子どもがこうした「一流」の高校、「一流」の大学に進学するための準備としての意味があるのであって、幼児のために、おこなわれるのではない。

幼児の教育のさしあたりの目標は子どもが小学校に入学したときにより成績をとるにおかれる。手とりばやいのは幼児に小学校で習う読み書き算数を教えることである。また、幼児に英語を教えておくならば、子どもが中学生になったときに英語の成績がよくなるだろうと、考えている親もいる。

そうした教科の教育は幼児の、しかも早い時期におこなわれるほど、将来は有利になる。四、五歳からでは遅すぎる。二歳から、いや一歳前の赤ん坊のときからおこなわれるなら、それだけ将来は有利である……、こういう早期教育への関心と、その成果

への期待が高まるにつれて、幼児の教育はいよいよ幼児のための教育ではなくなっていく。

教師はもちろん（親も）目立つ能力（その多くは点数化される能力）にだけ関心を払うようになる。曰く、漢字をいくつおぼえたか、曰く、数唱は何桁までできるか、曰く、花の名前をいくついえるか……。また、他よりもはやく、ちゃんとできるということを期待する。教師は（もちろん親も）子どもにむかっていうことばで、もっとも多いのは「はやく、はやく！」と、「ちゃんとやりなさい、ちゃんとできたか」である。

折り紙を折るのも、絵を描くのも、意見をいうのも、はやく、ちゃんとできる子どもは褒められる。逆に、のろい子やいつまでも上手にやれない子は「ぐず」だとか、「へた」だと罵られることになる。教師の（親の）子どもを見る目は、次第に「はやく、たくさん、じょうずに」できるかを、監視する目になっていく。

子どもがはやく、たくさん、じょうずにやれないと、その監視の目はいつそう険しくなっていく。そして、非難のまじった（表面的には激励ののだが）強制がはじまる。「どうしてあなたはやくやれないの」「○○ちゃんをご覧なさい。あなたと同じ年でも、もうあんなにたくさんやっているじゃない」「あなたもがんばればやれるのに」「そんなにいうことをきかない子、先生はもう知

らないからね」など、など。

たえず、教師の（親の）監視の目にさらされている子どもは、次第に教師の（親の）顔色をうかがうようになる。そしてオドロシ、萎縮していく。「自分はみんなとの競争に勝てるだろうか」「自分はどうしても○○ちゃんには勝てっこない」「自分は何をやってダメだ」「お母ちゃんからこんな状態では、先がおもいやられるといわれたが、ボクの将来は灰色だ」「おとなになるのは怖い」……かくして子ども心に、将来への漠然とした不安と、そして焦燥感がうえつけられていく。

——このような「急がせ教育」や「非難教育」や「おどし教育」を私は「むごい教育」という。将来の（しあわせの）ために今をその準備にあて、しかも今をよく生きることを犠牲にしている教育だからである。

### 弱者を切り捨てる教育

くだいようであるが、「むごい教育」は「甘やかし助長」の教育、「鋳型はめこみ」の教育、「将来への準備」の教育にとどまらない。また、ある。「弱者切り捨て」の教育がそうである。

絵本の表紙からぬけ出てきたような可愛い顔をした子ども、父

母、祖父母、ときには、曾祖父母までさかのぼった血筋のいい子ども、お屋敷町の豪邸に住んでいる金持ちの子ども、政府高官、高級官僚、“一流大学”の教授、大会社の社長、大病院の院長、羽ぶりのいい弁護士・外交官といった、社会の“成功者”の子ども、あるいは知能テストで測定したIQがとびぬけて高い子ども——そういう子どもだけが集まる学校や幼稚園が、もしあるとするならば、そこでおこなわれる教育はどのようなものであろうか。

私の想像力はきわめて貧弱であるので、それをうまく描くことはできないが、おそらく次のようなものではなからうか。教師はことあるごとに、「あなたがたは、将来、社会の上流階級の人になるのですから、まず何よりも上品さを身につけなければなりません。ことばづかい、礼儀作法、社交術、そして豊かな教養を学ぶことが大切です。そのためには顔の醜い子、血筋のはっきりしない子、貧乏人の子、それに下層階級の子たちと交わることは許されません。心身に欠陥のある子も避けるべきです」と説教し、あの忌わしいカリキュラム——しかも一流の傑出人を目標としたヒエラルキー式のカリキュラム——を用意し、微に入り細を穿った「鋳型はめこみ教育」をおこなうのではなからうか。

顔の醜い子や貧乏人の子や障害のある子とは交わるな、という

のは「そういう子どもたちはあなたがたとちがう人種なので  
す。一段低いところで生きる価値のない人種なのです。そういう子  
どもたちと交わると、〈朱に交われれば赤くなる〉のたとえのよう  
に、あなたがたもそのような価値のない人間になってしまうので  
す。また、〈悪貨は良貨を駆逐する〉のたとえどおり、あなたが  
た優秀な人たちも、次第におちぶれて、悪い人間になってしまう  
のです。価値のない人間は価値のないままに、その分に応じて生  
きればよいのであって、あなたがたはそのような子どもたち（お  
となたち）とは無縁なのです」ということを、暗に教えているこ  
とになるだろう。

立派な人間にするという教育は何も悪いものではないと、主張  
する識者がいるならば、その人におたずねしたい。醜い子ども、  
貧乏な子ども、障害のある子どもを排除した学校や幼稚園でおこ  
なわれる「立派な人間をめざす」教育で、いったいどんな人間が  
育つかを。弱い立場にある人に同じ人間として愛情を注ぐこと  
も、困っている人に同じ人間として手をさしのべることも、悲し  
んでいる人に同じ人間として慰みのことはをかけることも知らな  
い人間とは、いったいどんな人間なのかを。

上流階級という高いところから下を見おろすことは得意でも、  
弱い立場にある人、救いを求めて困っている人、悲しい思いにふ

けっている人に、同じ地盤で肩をよせあい、同じ人間として尽く  
すことができないう人間とは、じつはこの世でもっとも悲しい存在  
なのではなかるうか。

それにもかかわらず、弱い立場にある子どもに交わらせまいと  
いう教育が、今、学校でも幼稚園でも、罷りとおっている。そう  
いう教育を私は「むごい教育」といいたい。

さあ、のぞましい幼児教育とは何だろうか。それは「むごい教  
育」の反対の極点に位置する教育のことである。

それを具体的に描き出し、そして実践するのは読者であるあな  
たの務めだといえよう。

(神戸大学)

